

イエスの死（3時間の暗闇）

ルカ福音書23:44-49
(新改訳2017訳)

23:44 さて、時はすでに十二時ごろであった。全地が暗くなり、午後三時まで続いた。

23:45 太陽は光を失っていた。すると神殿の幕が真ん中から裂けた。

23:46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。

23:47 百人隊長はこの出来事を見て、神をほめたたえ、「本当にこの方は正しい人であった」と言った。

23:48 また、この光景を見に集まっていた群衆もみな、これらの出来事を見て、悲しみのあまり胸をたたきながら帰って行った。

23:49 しかし、イエスの知人たちや、ガリラヤからイエスについて来ていた女たちはみな、離れたところに立ち、これらのことを見ていた。

【祈りながら考えよう】

- (1) 十字架上で発せられたイエスの7つの言葉を挙げて下さい。
- (2) マルコ15章34節「どうしてわたしをお見捨てになったのですか」の「どうして」と言われた意味を説明して下さい。
- (3) 神殿の幕が裂けた意味をヘブル人への手紙9章と10章から説明して下さい。

【解説】

(1) 十字架上のイエスの言葉

イエスが十字架におかかりになったのは、だいたい朝の9時頃であった。そして昼までに、イエスは3つの事を語っておられる。

(1) 最初の言葉は23章34節、

《父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです》。

自分を不当な十字架にはりつけた者たちに対して、いささかも恨みも憎しみも持たず、かえってその無知をあわれんで、父なる神に罪のとりなしをしておられる言葉である。

(2) 第二番目の言葉は、

《まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます》

十字架の上で最初はイエスをののしっていた強盗の1人が、途中で悔い改めた。自分の罪を認め、この十字架を当然の報いと受け取り、《イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください》と、イエスに対する信仰を告白した時、イエスが応えられた言葉である。

(3) 第三番目は、ヨハネ福音書19章26-27節の言葉である。

《イエスは、母とそばに立っている愛する弟子を見て、母に「女の方、ご覧なさい。あなたの息子です」と言われた。

それから、その弟子に「ご覧なさい。あなたの母です」と言われた》

母と呼ばれていたマリアのことを、12人の弟子の中でただ1人だけ十字架のもとにいた愛弟子ヨハネに託する言葉である。

(2) 罪の暗闇

《さて、時はすでに十二時ごろであった。全地が暗くなり、午後三時まで続いた。》

真昼どき、太陽の光が最も明るく照る時、暗くなってきた。そして、ついには何も見えないほどになった。

この頃、日蝕が起こることは考えられない。これは自然現象ではない。神の御子イエスが十字架にかかって死ぬという、空前絶後の出来事、人類史上最大のただ1回だけの出来事がここに起こりつつある。

神の御子、聖きお方が、罪人のように強盗と一緒に十字架にかけられて殺されるということが今起こりつつある。

死んではならないお方が死ぬ。輝く太陽が光を失う、あるいは地球が潰れてしまって当然なこと。それを神の御子が、神の怒りを一身に負って十字架に死ぬ。それゆえに地球が潰れなかったのである。



暗闇に包まれる十字架

その暗闇がおよそ3時間続いた。十字架につけられている者の姿、これを見物している群衆の姿も暗闇にのまれて何も見えない。そこにあるのは闇一色。最初はこの異変にあわてて、イエスに対するののしりを不安と動揺の叫びに変えていた群衆も、やがて暗闇の中に声ものまれ、音もなくなつた暗闇が続いた。

(3) イエスの苦しみの絶叫

三時に及んだ頃、イエスの絶叫が聞こえた。これはルカにはないが、マルコ、マタイにある。マルコによれば15章34節、

《そして三時に、イエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」訳すと「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である》。これが第四番目の言葉である。

この暗い三時間は、イエスにとっては十字架における苦しみの絶頂であった。その苦しみがいよいよ増し加わっていた。そうしてその苦しみが最高に達した時、イエスは思わす絶叫された。

《わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか》

このイエスの叫びを、世の冷ややかな批評家たちは、イエスの十字架を見物していた群衆、あるいは祭司、律法学者たちは、なんたる女々しい叫びであるか、事ここに及んでなんとという見苦しい様であるか、なぜ静かに、堂々と死んでいかなかったのか、どうしてそんな情けない叫びをしたのか、と批判する。

私たちイエスを信じる者にとっては、この叫びこそ、イエスの苦しみがどんなであったのか、見捨てられてはならない者が見捨てられたほどの苦痛であった。永遠の初めから片時も父なる神と別であったことのない神の御子が、この時、一時神から見放されたように叫ばなければならないほどの痛みを痛まれたのである。

それは、それほど私たちの罪が深いということである。この時、神の怒りのもとに地獄にたたき込まれなければならない私たちである。しかし、イエスが代わってすべての罪人の罪を負い、このように叫ばれた、このような死を味わった。この叫びこそ、私たちにとっては救いそのものである。イエスがこのような死を受けなかったら、私たちは自分の罪の当然の報いとして、苦しみ悩まねばならなかったはずである。

(4) 私たちの想像できないほどの痛みの深刻さ

《わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか》

イエスは父に問うておられる。《どうして》と。イエスは弟子たちに、少なくとも三度、受難の予告をなさっている。自分が来たのは、何のためか、よくわかっていたはずである。十字架にかかることも、父の御心として、ゲッセマネの園において受け取られた。それなのに、ここに至って《どうして》という言葉が発せられたのか。

この時の痛みが、単なる肉体の痛みだけではない。単なる肉体の痛みなら、両側にいる二人の強盗も同じように痛んでいた。強盗たちは叫ばなかった。イエスは《どうして》と、深刻な問いを神に問わねばならなかったのか。

それは私たちの想像のできないほどの痛みの深刻さを表す《どうして》であるからである。イエスの悩みは、どうしてと問わねばならないほど、言語に絶するものであった、予想したようなものとは違っていた。それほどに私たちの罪は重く、深刻である。

《神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された》(ヨハネ3:16)とある。お与えになるほどにではない、お与えになったほどにである。神のひとり子を私たちの罪のために捨て、救いを与えて下さった。

(5) イエスの渇き

十字架上の五番目の言葉は、ヨハネ福音書19章28節、《それから、イエスはすべてのことが完了したのを知ると、聖書が成就するために、「わたしは渇く」と言われた》。

死の直前における深刻な渇きである。肉体的な渇きだけでなく、心の渇きでもあった。イエスが死ぬ。何のためか。ただ滅びゆく人類の救いのため、愛する者たちの救いのため、ただ愛というその一事のゆえである。

こんな私たちを、せつなく渇いて求めていて下さるイエス。その渇きに対して、一滴の水の報いもできない者、いつもイエスを渇かせている者である。

汚れ果てた魂を求めていて下さる。イエスの愛の渇きが、私たちを救われた者として、神を父と呼べる者としていく。手応えのない者、頑固で岩のような者、そんな者の上にイエスの渇きは愛の渇きである。与えようとしているのに、受けてくれない者たちへの渇きである。

(6) 救いは完了した

次の言葉は、同じくヨハネ福音書19章30節、

《イエスは酸いぶどう酒を受けると、「完了した」と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった》

《完了した》、これが第六番目の言葉である。

イエスが《完了した》と言われた時、イエスの死において、父から託されて来られた人類の救いのわざが、ここに全

うされたということである。イエスの生涯が、この十字架の上に終わる、それは同時に人類の救いが全うされたことを表す。《完了した》、すべてが成就した、この宣言において、人間の救いは全うされたのである。

(7) 父なる神に霊をゆだねて

イエスは息を引き取る前に言われた言葉が46節である。《イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」》その前の45節は《…すると神殿の幕が真ん中から裂けた》という言葉がある。この言葉は、ヨハネ19章30節の《完了した》というこの言葉のあとで、《すると神殿の幕が真ん中から裂けた。イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」》とある。

マタイ、マルコの言い方によると、イエスが大声で叫んで、息を引き取られたあとで、神殿の幕が真ん中から裂けたことが記されている。ルカの方では、息絶える前に、聖所の幕が真ん中から裂けたという言葉が先立っている。ルカの方では、《すると神殿の幕が真ん中から裂けた》と言って、《イエスは大声で叫ばれた》とある。結局、福音書を総合してみると、この出来事が、ほぼ同時に起こったということがわかる。

十字架におけるイエスの7つの言葉の最後は、《父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます》という言葉である。最後の最後までイエスは父に従い通された。ご自分の存在いっさいを父の御手にゆだねていた。

(8) 隔ての幕は取り除かれて

《息を引き取られた》、その瞬間、《神殿の幕が真ん中から裂けた》。マタイ、マルコの言い方で言えば、《神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた》。

このことをヘブル人への手紙によって説明を読もう。隔ての幕というのは、聖所と至聖所を分ける幕であって、これは一般の人は絶対に入ることはできない。神にとりなす役をする大祭司しか入ることができない。しかもその大祭司も年に一度、贖罪日に贖いの供え物をもって、動物の犠牲の血をもって入ることができるだけである。だから隔ての幕と言われている。



上から真っ二つに裂けた神殿の垂れ幕

ヘブル9章11-12節から、

《しかしキリストは、すでに実現したすばらしい事柄の大祭司として来られ、人の手で造った物でない、すなわち、この被造世界の物でない、もっと偉大な、もっと完全な幕屋を通り、また、雄やぎと子牛の血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました》。

イエスは、自分のためにも贖いを必要とする不完全な大祭司ではない。また毎年贖罪の供え物を捧げるといような不完全なとりなしではなく、完全な大祭司として、イエスはご自身の体を完全な供え物とされた。

《一度だけ》というのは完全を表す。不完全ものは何度繰り返しても不完全である。完全なものはただ一度でいい。イエスはその完全な大祭司として、完全なご自身の聖き血の供え物、あの十字架の上で流された血の供え物をもって、《ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました》。

(9) 完全な大祭司

さらにヘブル10章19-22節、

《こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。また私たちには、神の家を治める、この偉大な祭司がおられるのですから、心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。》

ここでは、十字架の上に裂かれたイエスの肉体が、隔ての垂れ幕であると言われている。イエスの死によって、私たちは完全に贖われた者として、なんら罪を問われることのない者として、神の御前に出ることのできる者とされた。

ユダヤ教の下では、一般の人は聖所や至聖所から締め出されていた。祭司たちだけが聖所に、大祭司だけが至聖所に入ることができた。今やそれはすっかり変わった。ある特別な階級の人たちだけが神に近づくことができるのではない。兄弟たちと呼ばれる、すべての信者が、いつでも、どこからでも、イエスの血によって神の御前に出ることができる。

イエスのあの裂かれた体が新しい生ける道である。わたしは道である、とイエスは言われた。そこになんの隔てもない。イエスによって、もはや私たちは良心のとがめから解放され、あらゆるいっさいの罪のとがめから解放される。

私たちは神様の前に、幼子のように、「お父様」と言って、自由に近づくことが出来る。その事を表すように、神殿の聖所の幕がもはや必要なきものとして、真ん中から上から下まで真っ二つに裂け果てたのである。

イエスがおられる時、幕はもはや跡形もなくなってしまっている。イエスを通して私たちはもうすでに至聖所に入っているのである。

コリント第1の手紙3章16節に、《あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか》とある。私たちはもう聖所に入っているだけではない、私たちが神の聖所なのだ。神の御霊を宿している者だ。

(10) 百人隊長の信仰告白

《百人隊長はこの出来事を見て、神をほめたたえ、「本当にこの方は正しい人であった」と言った。》

終始イエスの十字架における様を見、そこに起こった出来事を見ていた、ローマの兵士を指揮する百人隊長は、ただローマの軍人としての職務を果たすためにやっていた。それだけに、この事態を客観的によく見えたのであろう。彼がそこで達した心の様は、《本当にこの方は正しい人であった》ということである。

マタイ、マルコの方を見ると、《この方は本当に神の子であった》と言っている。イエスの死は客観的によく見ていれば、単なる人の死の様とは違う。百人隊長は今まで何人も十字架にはりつけてきた、それを指揮してきたであろう。なお処刑だけではなく、戦場において、あるいは様々な所で人間の死ぬ様をさんざん見てきたであろう。

それだけに、こんな死に様はかつて見たことがない。これは英雄のような死ではない。豪傑のような死でもない。大宗教家の死の様でもない。あるいは大学者の、大政治家の死の様でもない。この世の賢人たちの、あるいは聖人と呼ばれるようなそういう人々の死に様でもない。

このお方イエスにだけ見られる死に様である。そのことがこの百人隊長の胸を強く打った。人のようではない。神のような姿をそこに見たのであろう。

しかし、百人隊長のこの言葉はどういうことか。十字架にふさわしい者として遮二無二はりつけられたイエスである。しかし、十字架に大罪人としてはりつけられたイエスが、結局義人であった、神の子であったということになったら、この百人隊長の告白は、そのまま逆に、イエスを十字架につけた者たちがみな悪人であった、罪人であったということになる。

イエスを正しい人とするなら、これを十字架につけた者はすべて悪人である、恐るべき罪人である、ということの言いあらわしである。一点の罪もないイエスを十字架につけたのはまさに人であり、この世である。世はまさに、あの十二時から三時まで暗闇になったあの深刻な暗闇をあらわすもの。世は神の御子を十字架にはりつけ、神に対して真っ向から逆らう、罪の世、悪魔の世であることが、深刻な暗闇によって象徴された。

イエスを十字架につけたのは誰か、ひいては私たちすべてである。イエスを神の御子と信じて受け入れるか、そうでなければ、イエスをはりつけにする者の側に立つか。冷やかに、我関せずと無関心に通り過ぎることも、イエスを否定すること、受け入れないことと同じことである。だからイエスを受け入れない者は神を受け入れない者、そうしてすべては罪人であるということである。

(11) 十字架の出来事を見ていた人たち

《また、この光景を見に集まっていた群衆もみな、これらの出来事を見て、悲しみのあまり胸をたたきながら帰って行った。》

好奇心で見ていた群衆、あるいは十字架から降りてこいと言って、さんざんののした群衆も、今はもはや何ごととも言えず、ただ厳粛なこの光景に心打たれて、胸をたたきながら帰って行く者たちであった。

《しかし、イエスの知人たちや、ガリラヤからイエスについて来ていた女たちはみな、離れたところに立ち、これらのことを見ていた。》

離れたところに立って、十字架の出来事を見守っていた人々がいた。ガリラヤからついて来た女の弟子たちであった。彼女たちは弱かった、それだけにイエスを慕うことが強かった。怖かったに違いない、しかし、男の弟子たちのようにどこかへ隠れてしまうには至らなかった。イエスを慕い、イエスを本当に求めて、遠くからこれを見守らざるを得なかった。弱い者ほど、いざという時には強くなる。弱気がゆえに神を慕い、主を慕うことが強いからである。

《ガリラヤからイエスについて来ていた女たち》、これらの女たちがどういう人たちであったか、マルコ、あるいはマタイ福音書を見ると、名前が記されている。

マルコ15章40-41節、

《女たちも遠くから見ていたが、その中には、マグダラのマリアと、小ヤコブとヨセの母マリアと、サロメがいた。イエスがガリラヤにおられたときに、イエスに従って仕えていた人たちであった。このほかにも、イエスと一緒にエルサレムに上って来た女たちがたくさんいた》。

弱い者とされていた、男たちよりも弱さを知っていた女たちの方が、本当にイエスに近かったということがわかる。弱い者ほど本当にイエスに近いのである。

十字架上のイエスの最後の言葉

No	十字架上のイエスの言葉	マタイ	マルコ	ルカ	ヨハネ
1	父よ。彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。			23:34	
2	まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。			23:34	
3	女の方、ご覧なさい。あなたの息子です。 ご覧なさい。あなたの母です。				19:26-27
4	わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。	27:45	15:34		
5	わたしは渇く。				19:28
6	完了した。				19:30
7	父よ。わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。			23:46	